



## 天空の大地で

先日、おにぎりを持って、芋掘りに出かけた4・5歳児。長引く秋雨の隙間を縫うように、少し肌寒い曇り空の下を30分ほどの道のり。子どもたちにとってはそれなりの遠出だ。

少し小高くなっているこの地域から、まずは一旦街道へと下る。そしてその道の向こう側、街道に沿うように延びる丘陵地。そこを駆け上がった先に、空に溶け込むように大きく農地が広がっている。毎年お世話になっている伊藤農園の芋畑は、その一角にある。

そんな起伏もある道のに加え、おにぎりが入っていたリュックに帰路はお芋が入るので、子どもたちにはその距離は少し長く感じるのかもしれない。

その数日後、彼らが持ち帰った芋を入れたダンボールが、玄関前に置かれていることに気づいた3歳児たち。

その中を覗きながら、「食べてもいいのかな」と言う声を聞いた保育者が、「じゃあ、小さ



いのを人数分とって、洗おう」と声をかける。けれど、それぞれが箱から手にした芋たちのサイズはバラバラ。そこで、すかさず大きさを比べ。

「これが、大きいお芋」と保育者が基準となるものを手にとって見せると、「じゃあ、これは小さいだよね」「これは中くらいだ」と自分なりに見比べながら次々と選び直していく。

それが終わって、みんなの持つ芋の数を順番に数えていくと17本。今日の登園人数は、その場にいない者も含めて22人なので、「どっちが多いかわかる?」と問いかけてみるも「うーん」。

そこで、「18、19、20…」と数えながらさらに芋を子どもたちに手渡ししていく。そして、「21、22…」と言った瞬間に、「先生、ストップ」と声がかかる。そして「小さいお芋、22個選べたね」と声が上がった(10月24日「大きいのと中くらいのと小さいの」)。

こうした日常の生活や遊びの中で、その必要性を伴いながら、大きさを数に親しんでいくことが、実は日本の幼児教育・保育

の大きな特徴のひとつなのだ。

海外の保育研究者が日本の保育現場を視察していた時、「一体いつ活動が始まるのか」と質問があったという話を聞いた。つまり、文字や数を取り出した「勉強の時間」を期待しているようなのだが、その園では、延々と遊び続いているだけなのだ。

しかし、そうした遊びの中には、数に触れたりそれを利用して楽しむ要素がいくらでも埋め込まれているものだ。

さらに興味深いのが、そうした遊びや生活を通して、足し算や引き算ができるようになった日本の子どもたちに、「どうしてできるようになったの?」と尋ねると、なんと「自分で考えた」と答えたのだというのだ。

この感覚こそが、数や量を身体的感覚を通して獲得している証。この骨太な理解が、学童期以降の抽象的な思考を支える確かな土台となる。

そして、こちらは4・5歳児たちのある日。

先日の「外の日」の遊びの小道具にと、その箱と一緒に組み



○番書く」と言葉を変えながら書いて、その番号の棒に何枚だって貼っていけばいい。「○

くじを作ってくれたのが、Kくんの小学生のお兄ちゃん。

その彼が、普段の遊びでも使えるようにと、新たなおみくじを作ってくれた。箱からみくじ棒を取り出してみると、「何も書いてないじゃん!」。そう、あおぐみで自由に使えるようにと、まっさらなものを新たに準備してくれたのだった。

早速、その棒に何を書くのかと相談していくと、「数字にしたら?」というアイデアが。番号に対応する内容を別決めていけば、色々なおみくじになるという発想に感心する保育者。

早速、みんなでみくじ棒を数えると15本。「あおぐみ、15人だからじゃない?」「だから、箱の色も青なんだ」と作り手の配慮にも思いを巡らせていく。

次に問題になったのは、その細いみくじ棒にどうやって数字を書き込むのかということなのだが、それもシールに書いて貼れば良いということに。それであ

●編集 幼保連携型認定こども園せいび  
●発行 折井 誠司  
●印刷 折井 誠司  
●発行所 幼保連携型認定こども園せいび  
〒1920364 東京都八王子市南大沢5-12  
電話 042-675-1155  
ファックス 042-677-5643  
E-mail seibi@kodomo-kyo.jp  
http://kodomo-kyo.jp

園長 折井 誠司